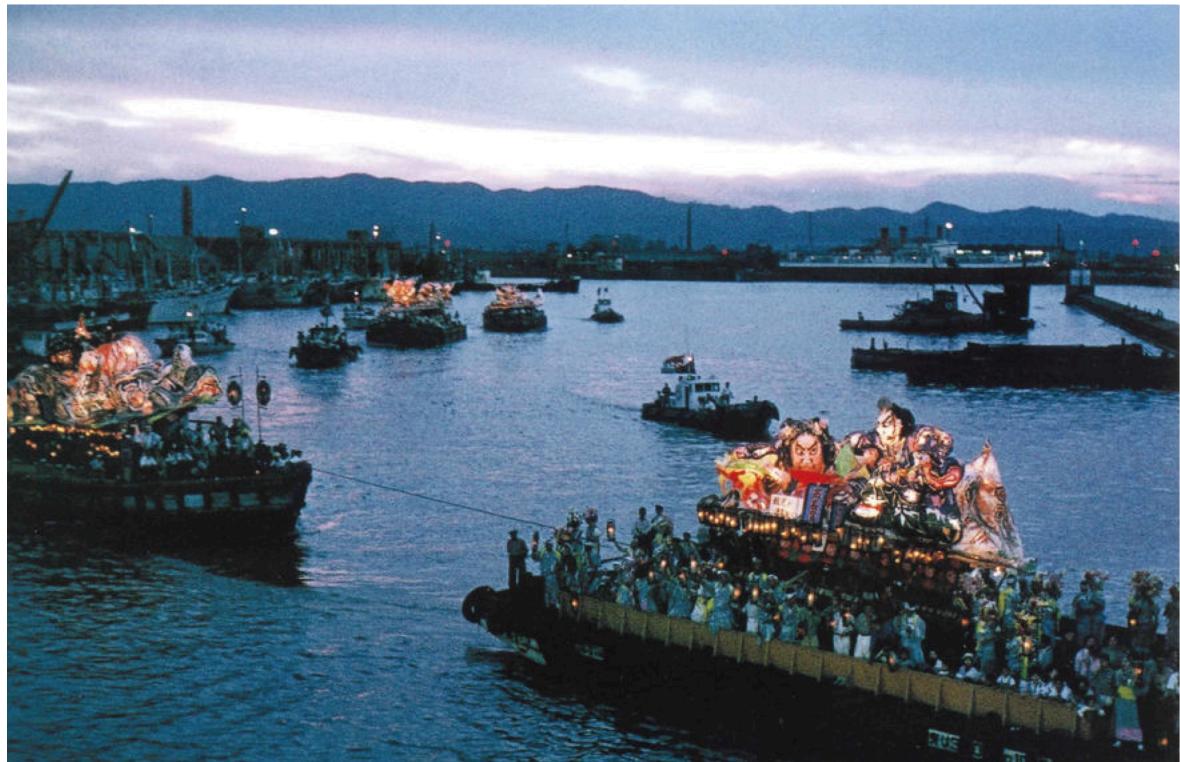


青函連絡船通信士として、39年間海峡を往復した金丸大作。
ファインダー越しに船と海と街を見つめ続けた彼は、
海峡を挟んだ二つの街に暮らす人々と
連絡船で働く人々の息遣いを写真に遺した。

海峡の記憶。



青森湾を行くねぶた海上運航（昭和28年8月）

海のない群馬県生まれの私が青函連絡船の存在を初めて知ったのは官立無線電信講習所(現電気通信大学)卒業の際の求職一覧票でした。戦争だけなわの昭和19(1944)年のことです。函館と青森を結ぶ国内航路なら少しは安全ではないかと考えて就職を希望しました。採用が決まり、函館に赴任するときに青森桟橋で初めて乗った連絡船は飛鸞丸でした。その巨大で豪華な客船が職場になるのだと、田舎者の私は大感激したものです。後に知ったのですが飛鸞丸の就航は大正13(1924)年。奇しくも私の生まれた年なのです。こんなところにも連絡船との「縁」を感じました。

写真の世界に足を踏み入れたのは、戦後間もない昭和23(1948)年です。私の職場である連絡船がどのようなものを海なし県・群馬に住む両親や友人に伝えるには写真が最適と考えたのがきっかけでした。父と兄が新聞記者をしていた関係で、私は小さいときからハイポ(現像液)の匂いのする暗室でよく遊んでいました。そのように写真を身近に感じて育ったことも影響していたと思います。

写真・文 金丸大作

『青函連絡船の記録』(著:金丸大作 株式会社生活情報センター刊)より
写真提供・協力 金丸友世、吉田智士、津田基